

大江戸スカイツリー

都立大江戸高等学校教諭 鈴木

本校4階の美術室から東京スカイツリーがよく見える。現在500mを越えて、最上部のアンテナが天空に向かって上昇を続けている。

一昨年の暮れ、気がついたら北窓から真正面にスカイツリーの骨組みが見えた。地図で調べてみると北に3.5km位の距離にある。意外と近い。それからというもの今日はどの位のびたか、どこの足場が取り払われたかと観察することが日課になった。

はっきり見えることもあれば、モヤで霞んでいることも、上部が雲に隠れて見えないこともある。日によって様々な表情を見せるスカイツリーは飽きることがない。朝自宅近くで、晴れた日にはビルの合間から富士山を見ることができるが、スカイツリーを見るのもこれと同じような感覚である。

昨年6月頃、美術部のミーティングで文化祭にスカイツリーを作ることを提案した。最初は正門正面に2~3mスカイツリーを作って、文化祭の目玉にしようと考えていた。しかし、どうせ作るならもっと大きいものを作ろうということになり、切りのいい100分の1の6m34cmではどうだろうか。本校のアトリウムの吹き抜けの空間を計ってみたら高さ8m、制作場所としてもうってつけで、これならいけると思った。

スカイツリーの骨組みは、最初から籠のように編もうと考えていた。そうすれば断面が正三角形から次第に円形になっていく形が表現しやすい。たて芯は竹以外の素材は考えられなかったが、編み芯の素材である平紐に出会うまでは時間がかかった。

美術部員3人がスカイツリーの担当に決まり、ネットから情報を集めて図面を起こし制



作に入った。7月から完成まで3ヶ月を要したが、制作過程のことは紙面が限られているのでここでは省略する。

完成するとマスコミ（新聞、テレビ、ラジオ）からの取材が相次いだ。また文化祭では近隣の住民が多数見学に訪れた。スカイツリーの制作費は3~4万円だが、我が校の宣伝になったことを考えればその費用対効果？は計り知れない。

文化祭が終わってもスカイツリーは解体されることなく、アトリウムにある。12月に入ると生徒会が電飾で飾りつけをして、クリスマスツリーに早変わりした。今やスカイツリーは大江戸高校にとってなくてはならない存在になっている。

「私は新聞の記事を見て、とても嬉しかった。大江戸高校を誇りに思う。」文化祭に来た美術部OGのことばである。

美術・工芸はその存在によって人々に感動を与え、時に人の心を動かす力にもなる。それこそが「美術の力」「工芸の力」である。大江戸スカイツリーは私にそのことを強く実感させてくれた。